



TITLE:

社會的文化的變動の形式(一)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 社會的文化的變動の形式(一). 經濟論叢 1937, 45(6): 763-779

ISSUE DATE:

1937-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131036>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第 四 十 五 卷 第 六 號

昭和二十二年十二月一日發行

論 叢

資金の増減伸縮の機構……………經濟學博士 小島 昌太郎
社會的文化的變動の形式……………文學博士 米田 庄太郎
資本主義の純粹理論……………文學博士 高田 保馬

時 論

國稅の部分的改正……………經濟學博士 汐見 三郎

研 究

ナチス政策と獨逸社會保險の改革……………經濟學士 中川 與之助
明治維新の經濟的意義……………經濟學士 堀江 保藏
再保險の經濟的本質……………經濟學士 佐波 宣平
立地理論の一展開……………經濟學士 菊田 太郎

說 苑

ゲルストナーの經營分析論……………經濟學士 岡部 利良
スウィゲティのダンピング理論……………經濟學士 岡倉 伯士

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第四十五卷總目錄

社會的文化的變動の形式 (一)

米田 庄太郎

緒言

(一) ウォームの社會進化形式論と夫れの批判

(二) ソロキンの社會的文化的過程形式論と夫れの批判

緒言

古代文化民族に於て、政治家、思想家、學者等、特に知性の勝れた人々が、自分等が生活して居る社會、自分等が恩澤を受けて居る文化に於て、重大なる變動が起りつゝあるを觀破し、夫れが對策を立てる爲めに、夫れの由來及び發達を如何様にか了解し、或は説明しようと企だて始めて以來、今日に至るまで、又今日に於ても、社會的文化的變動を考究する人々は、意識的にか又は無意識的にか、明亮にか又は暗々裡にか、其の變動の形式を如何様にか心の中に畫き、即ち圖式化し、そうして其の形式表象によりて自己の思索或は研究を指導しようとして居る様に思はれる。更に其の思索或は研究が、一定の形式表象によりて深く根本的に支配されて居る様な人々も、少なくないと思はれる。今日の我國の思想家や學者に就て見るも、合理主義的な人々の中には、社會的文化

的變動は急激にか又は徐々にか、何れにしても合理的に上昇する一直線を畫いて、進行するものゝ如く考へて居る人々は少なくなく、又之れに反して非合理主義的な人々の中には、急激な轉向によりて折線を畫いて、進行するものゝ如く考へて居る人々は少なくないと思はれる。尙ほ又夫れは圓形を畫いて進行するものゝ如く考へて居る人々、交代的二項式律動形を畫いて進行するものゝ如く考へて居る人々、辨證法的三項式律動形を畫いて進行するものゝ如く考へて居る人々、更に下降的一直線形を畫いて進行し、人類は益々墮落し、頽廢し行くものゝ如く考へて居る人々等もあると思はれる。但し其等の形式表象は、其等の人々によりて常に明亮に意識されて居ると云ふのでなく、寧ろ明亮に意識されて居ない場合が多く、且つ夫れが爲めに其等の形式表象の影響が、一層深刻な場合が少なくないと思はれる。

社會的變動のもろ／＼の形式表象は、右に述べし如くに、個々の思想家や學者の思索及び研究を、根本的に指導し、或は支配すると云ふだけでなく、更に一定の時代或は時期に於ては、其等の形式表象中の一のものゝが特に大なる勢力を振ひ、他の時代或は時期に於ては他のものが特に大なる勢力を振ふて、一般的に人々の思索や研究を指導し、或は支配して居ることが發見される。かくて社會的文化的變動に關する思想や學說の、歴史的發達を考究するに當つては、夫れ／＼の時代或は時期に於て、如何なる形式表象が特に大なる勢力を振ひ、一般的影響を及ぼして居るかに注目することは、甚だ肝要であると思はれるのである。

尙ほ私は社會的文化的變動を考究する各思想家、各學者が、自分の思索或は研究は如何なる形式表象によりて指導され或は支配されて居るかを、時々自から反省して見ることが肝要であると思ふ。と云ふのは、吾々は社會

的文化的變動の何れの方面の思索或は研究に於ても、常に意識的又は無意識に、一定の形式表象のみを指導原理として用ひて居るが爲めに、重大な謬見に陥つて居る場合や、又は一定の方面の研究に於ては、暗々裡に一定の形式表象を指導原理とし、他の方面の研究に於ては、やはり暗々裡に他の形式表象を指導原理として適用して居るが爲めに、重大な謬見に陥つて居る場合などがあるからである。尙ほ後に述べる如くに、社會的文化的變動は宇宙間に於ける最とも複合的な事象であるが故に、夫れの總ての方面に、或は全體に通じて完全に妥當すると云ふが如き、最大の普遍性を具有する形式を發見し、かゝる形式表象を作り、或はかゝる形式概念を構成することは不可能であるから、吾々が多くの方面の研究に於ては、一定の形式表象を指導原理として意識的に適用しながら、或一方面の研究に於ては、無意識的に他の形式表象を指導原理として適用して居ることが、後に他人の批評によりてか、又は自己吟味によりて發見されるに當つては、夫れは論理的に考ふれば明かに論理的不齊合の誤謬に陥つて居るのであるが、併し其の一方面の現實的事態に即して考ふれば、之を正當に把握して居るものであることが、確證される様な場合もあるのである。

甚だ簡單ながら以上述べし如くに、吾々が社會的文化的變動に關する思想或は學說の歴史的發達を考究するに當つても、亦夫れに關する何れかの思想家或は學者の思想或は學說を考究するに當つても、更に夫れに關して自から思索し、或は研究するに當つても、思索或は研究を明らかにか、又は暗々裡に、指導又は支配して居る形式表象或は形式概念に注目することは、甚だ肝要であるとすれば、今日社會的文化的變動を考究するに當つては、夫れの形式に關して今日までに吾々に與へられて居るもの／＼の表象或は概念或は説を、先づ總括的組織的且つ批判

的に考察して、其の形式其物の概念をより多く精確に規定し、更に如何にして其等のもろ／＼の表象或は概念或は説の何れよりも、より多く勝れたるものを發見し、或は構成す可きかを考究することは、甚だ肝要な問題であると思はれる。然るに今日までの處で、少なくとも社會學者間にありては、殊に私の知る範圍内に於ては、此問題を組織的に研究した人々は甚だ少くない、或は殆んどない様に思はれる。それで私はかねて此の問題に就て、一度私の考へをまとめて見たいと思ひながら、つい其の暇がなくて今日まで過して來たのであるが、然るに近來米國に於て、社會學者として大に名を擧げて來たハーヴァート大學社會學部長ソロキンが、本年公にせる大冊四卷の著作「社會的文化的動學」(Prithim A. Sorokin, *Social and Cultural Dynamics*, 1937)の第一卷中に、此の問題が組織的批判的にかなり詳して論述されて居るのを見て、(但し彼は同書第四卷に於て、此の問題を一層詳しく論究すると云ふて居るが、同卷だけはまだ刊行されて居ない様である)大に興味を感じ、本論文に於て、彼の説を批判的に考察し、慎重に評價しつつ愚見の一斑を述べたいと思ふ。併し夫れに先だち私は此處に、佛蘭西の著名な社會學者で、萬國社會學院の創立及び發達の爲めに大に盡力せる故ルネ・ウオームが、千九百七年に公にせる「社會諸科學の哲學」(*La Philosophie des Sciences Sociales*)第三卷の中に、「社會進化の形式」と題して、此の問題に就て論述して居ることを、簡單ながら批判的に考察して置きたいと思ふ。是れウオームの論述はソロキンの夫れに比すれば、餘程粗雑なものであるが、併し少なくとも私の知る範圍内にあつては、此の問題を比較的に組織的に取扱へる最初のものの一にして、そうして夫れによりて吾々は現世紀の初期に於ける此の問題の研究狀況を、一般的に學ぶことが出來、且つ夫れを批判的に考察することによりて、ソロキンの説を批判的に考察する爲めの適當な足場を固め、

又其の批判的考察の目標を見定めて置くことが出来る、思はれるからである。

(一) ウォームの社會進化形式論及び夫れの批判

ルネ・ウォーム (René Worms) は彼の社會學上最も重要な著作 *Philosophie des Sciences Sociales* 第一卷を千九百三年に、同第二卷を千九百四年に、同第三卷を千九百七年(第二版は千九百二十年)に出版して居るが、其の第三卷、第三部、「社會進化論」の最初の章を「社會進化の形式」と題し、夫れは即ち外から見たる社會進化の外形を意味するものであると解して、其の頃までに唱へられて居た社會進化形式論を、大體上三種に分つて批判的に考察して居るのである。其の(一)は、社會の進化は絶えず上昇する直線形を有するものであると見るもの、其の(二)は、社會の進化は循環する或は復歸する圓形を有するものであると見るもの、其の(三)は、社會の進化は螺旋線を有するものであると見るものである。(私は此處に便宜上、(一)を上昇直線形説、(二)を圓形説、(三)を螺旋線形説と稱して置く。)

先づ彼が(一)上昇直線形説に就て論述して居る處によると、古代及び中世紀にありては、「黃金時代」或は「失はれたる樂園」から最近時に至るまで、人類は漸次に墮落し頽廢して居ると見る思想が、一般に行はれて居たのであるが、今日に於てはまさしく夫れと正反對な思想が、一般に支配して居る。夫れは即ち社會進化全體の形式は、其の出發點から、想像し得られるだけ遠い又高い處に置かれて居る到達點へ、絶えず高上し上昇し行く一直線によりて、圖式的に表はされるものであると見る思想である。併し少し注意して考察すると、社會は決して常に進歩し上昇して居るのでなく、退歩し下降する時代もあり、又社會の一方面が進歩すると同時に、他の方面が退歩

する時代もあり、かくて一切の社會制度は、決して同一の歩調を以て進行するものでなく、又社會の進歩は決して連續的なものでないことが、明かに認められる。要するに社會進化の全體の形式は、決して連續的に進歩する一直線によりて、圖式的に表はされ得る様な、單一單純なものではなく、種々な進化線が相交又し、紛糾錯雜して居るものである。

次にウォームが圓形說に就て論じて居る處によると、今社會進化の全體は、決して連續的に進歩する一直線によりて表はされ得るものでなくして、諸線の複雑な纏れ合ひを示すものであるとするも、其等の諸線の方に於て、一の一般的向き (*un sens général*) を發見することが出来ないであらうか、即ち其の方向は直線的であると見るのは謬見であるとしても、曲線的であると見るのは正當であるまいか。そうして曲線の中で最とも單純にして、人々の先づ注目するのは圓である。かくて社會進化は、圓形を畫くものであると見る説が、唱へられるに至つたのであるが、其の代表的なものは、第十八世紀に伊太利のヴィコの唱へた復歸說或は循環說である。そうして一見すれば、歐洲の歴史は此の説を確證する重要な事實を呈供するが如く思はれる。併し嚴密に吟味して見ると、決してそうでないことが發見される。人類の歴史は、決して以前にありしとまさしく同じ點を、再び通過して居ない。社會進化は甚だ複雑なものにして、夫れの總ての部分或は方面が、以前にありしとまさしく同じ狀態に、再び立ち歸ると云ふ様なことは、全然不可能である。成就された事業或は作業は跡を残し、かくて現在とは過去と異なるものとなる、社會進化が完全に其の出發點に復歸すると云ふ様なことは、全くあり得ない。

終りにウォームは螺旋線形說を考察するに先だち、其の準備として、第十九世紀の始めに現はれた二説を考察し

て居るが、其の一はサン・シモンの唱へた説、即ち人類は有機的時代(建設的或は構成的時代)と批評的時代或は危機時代(破壊的時代)との交代的二時代を通過して、發達し行くものであると見る説(人類は有機的時代に於ては一の社會型を構成或は建設し、批評的或は危機的時代に於ては之を破壊し、更に新しき有機的時代に入りて新しき社會型を構成或は建設すると云ふ様に、無限に進んで行くのである)にして、便宜上二項式律動説(rythme binaire)と稱し得られるもの、其の二はヘーゲルの唱へたる説、即ち社會進化或は人類の發展は正、反、合と辨證法的に實現され行くと見るもの、便宜上三項式律動説(rythme ternaire)と稱し得られるものである。そうして先づ一般的に云へば、此等の二説は共に其の原理に於ては正當であるが、併し其の形式に於てはあまりに排他的或は究屈すぎると思はれる。更に特にサン・シモンの二項式律動説に就て考へるに、彼の云ふが如き二つの時代間には、確かに一種の反對關係の存立することは認められるが、併し其等の二時代の各々は他より多くのものを繼承して居るので、かくて全體としては、他と異なるよりも、より多く他と似て居ると云ひ得られるのである。次にヘーゲルの三項式律動説に就て考へるに、社會に於ては一の向き或は意味に於ける作用と、反對の向き或は意味に於ける反作用と、兩者の和合或は調和との繼續が、屢々行はれて居ることは疑はれないが、併し此の過程は決して宿命的に押しつけられて居るのではないことや、又少なくとも永い時代を通じて、連續的作用が行はれ得ることも、否定され難い。そうして右に述べしが如きサン・シモンの説、及びヘーゲルの説の評價から出發して行くと、吾々は社會進化を圖式的に總括する仕方に就て、直線形説と圓形説とを適當に調和すると認め得られる、一の新しき概念を構成することが出来るのであるが、今かゝる新概念を巧妙に作り上げたのは、ラウール・ヅ・ラ・グラスリー(Raoul de la

Grasserie) である。

グラスリーの論ずる處によると、一方から見ると、社會進化は一の上昇、一の進歩である。是れ社會進化に於ける後の状態が、前の状態よりも勝れた或物を有するのでなくば、人々は之を實現しなかつたであらうと思はれるからである。併し他方から見ると、社會進化は多くの關係に於て、社會を原始状態から大に遠ざからしめた後に、再び其の原始状態の近隣點にまで引き戻す様に見へる。かくて吾々は、將來は、過古の諸状態が已れに直接續行せる反對の諸状態を、種々に結合することによりて生ぜるものゝ改善を伴ふて、部分的に其等の過古の諸状態を復現すると、推斷することが出来るのである。換言すれば社會進化は以前に實現せる諸状態に似て居るが、併しより高等である状態に、週期的に到達すると思はれるのである。そうして此の事態を圖式的に表はす爲めに、吾人は新状態を表はす點は、舊状態を表はす點と同一の鉛直軸の上に立つが、併しより高い水平線上にあると、云ふことが出来る。要するに出發點から到達點へ導いて行く線は、螺線であるのである。更に此の螺線を産出する運動は、連續的な運動であるが故に、此の螺線は無限螺線である。かくて此の運動は、直線形説の主張するが如き上昇的であると同時に、又圓形説の主張するが如き、圓形的な或は循環的な或物を有するのであるが、其の圓形たるや閉ぢられた圓形ではなく、總て進歩的なものに於て認められる如く、開かれたる圓形であるのである。

グラスリーは右に述べしが如き、彼の巧妙なる螺線形説を支持し、證明する實例として、多數の社會的事實を列擧して居る。そうして吾々は此の思想の中に、眞理の大なる部分が含まれて居ることを、喜んで承認する。

又此の思想は甚だ多くの場合に於て、精確であるとさへも考へ得られる。併しグラスリー自身の信するほど、廣大な普遍性を具有するものとは考へ得られない。或社會現象に於ては、進化は夫れと異なる形式を有すると思はれる。例へば科學にありては、進化は一定の場合に於ては、新しき眞理が以前に證明されて居る眞理の上に、單に加はつて行くことによりて實現されて居る。又は決して二度と現はれない誤謬の除去によりて、實現されて居る。そうして此等の場合にありては、以前の狀態或は階段への部分的復歸さへも起らない。併し吾々は何れの形式にも敢て優越性を認めようとは思はない、殊に何れの形式も、決して絶對的に普遍的な價值を有するものとは考へない。

尙ほウオームは、復歸說の一の特殊な、又嶄新な一形態として、波蘭土の社會學者ワイゼングリュン（Weizen-grün）の唱へた革命的回顧說（a rétrospection révolutionnaire）を批評して居るが、其の革命的回顧說と云ふは、つまり革命は過古に於て其の模範を求め、之れに訴へて、其の建設しようとする新制度或は新社會を正當化し、又之を其の破壊しようとする舊制度或は舊社會から根本的に區別しようとするものであると、主張するのである。ウオームは此の說にも、一定の眞理を認めるが、併し革命は全然過古の一定の時代の回顧から、成立するものであると見るのは謬見であつて、過古を回顧し、之を復活させると同時に、又將來の爲めに新しき或物を創造するものにして、かくて新時代の始めと見られるのである、と考へる。尙ほ彼は革命的回顧說はたとひ全然精確であるとしても、夫れは只社會進化に於ける一の例外的時期を説明するだけに止まるものにして、其の中に社會進化の一般的形式を含蓄して居るものではないと、論じて居る。

ウォームは以上述べし如くに、從來唱へられた諸種の社會進化形式説の何れにも、一定の眞理を認めると同時に、其の何れも決して社會進化の全體の形式を、圖式的に完全に表はすものでないと考へ、更に複雑極まる社會進化の全體を、簡単な數學的圖式によりて完全に表はすと云ふ様なことは、全く不可能であると認め、且つ社會進化の外形の如きものの研究に、あまり多くの時間を費やすのは徒勞であると信じ、そうして彼が社會進化の眞髓をなすと認めるものを深く探究する爲めに、特に力を注いだのである。

以上述べしウォームの社會進化形式論の大要によりて、吾々は現世紀の初期に於ける社會進化形式問題の研究狀況を、大體上學ぶことが出來ると思はれるが、私は更に之を批判的に考察して、ソロキンの説の批判的考察の足場を固め、又其の目標を見定めて置きたいと思ふ。今私がウォームの説を批判的に考察するに當つて、特に重要視したいと思ふ根本的問題は二つある。其の一は、ウォームの社會進化の形式の概念の規定に關する問題である。即ち彼の如くに社會進化の形式の概念を規定するに於ては、夫れで果して社會進化の形式の内實を、十分に把握すること、或は了解することが出來るか云ふ問題である。其の二は、社會進化の形式に關する從來の主要な諸見解或は諸説として、彼が列舉して居るものの何れも、彼の批評する如くに、其の普遍性のさほど大ならぬものであるとするも、夫れが爲めに其等のものの何れよりも、更により大なる普遍性を有する見解或は説を立てることは、不可能であるが如くに臆斷し、かくて其等のものの外に、更に新しき見解或は説を立てようと努力するのは、無益な徒勞であるが如くに論斷するのは、學問論上果して正當であるかと云ふ問題である。

先づ第一の問題に就て考究するが、ウォームはさきに述べし如く、社會進化の形式とは、つまり内から見たる

社會進化の内容、或は實質、或は實質的内容、或は眞髓をなすものから區別される處の、外から見たる社會進化の外形を意味するものと解し、隨ふて社會進化の形式の問題は、實質的にはあまり重要なものとは考へて居なかつた様である。かくて彼は此の問題を比較的軽く取扱ひ、其の研究には眞剣味が缺けて居る様に思はれる。もつとも形式と外形とを全く同一視することは、廣く行はれて居る通俗の見解であるから、通俗的には兩者を全く同一視して置いてもよいが、併し學問上では形式は單に外形を意味するだけのものでなく、夫れ以上に重要な意味をも有す可きものである。此處では近代の認識論に於ては、形式の概念に如何に重要な意味が與へられて居るかを論述する暇はないから、敢て夫れには觸れず、只社會學上に於て、社會進化の形式と云ふが如き場合に於て、吾々は形式の概念を如何に規定す可きかを、極簡単に述べるに止めるが、要するに私はかゝる場合に於ては、形式の概念は、形式とは只外形を意味するだけのものでなく、更にウオームの言葉を借りて云へば、實質或は眞髓をなすものの概括的或は要約的或は公式的表現をも意味するものとして、規定さる可きであると思ふ。そうして此のことはウオーム自身も暗に承認して居たと思はれる。と云ふのは、彼はサン・シモンの交代的二項式律動や、ヘーゲルの辨證法的三項式律動なども、社會進化の形式の一種と認めて居るが、併し其等のものは決して、彼の云ふが如き、社會進化の單なる外形を意味するだけのものとしての、社會進化の形式とは認めらる可きでなく、サン・シモンやヘーゲルが社會進化の眞髓をなすと見るものの、重要な一方面を表現するものとしての社會進化の形式であると、解さる可きものであるからである。そうして右に述べしが如き概括的或は要約的或は公式的表現は、數學的圖式に於て表はされるに於て、其の形式としての特質が最もよく發揮されるのであるが、併

し必ずしも數學的に圖式化されなければならないと云ふのではなく、只命題的に簡明に言ひ表はされるだけでも、或は言葉で公式化されるだけでも、よいと思はれるのである。されどそうすると又社會進化の形式の概念をあまりに廣く解し、それより種々な誤解が生ずる恐れがある。それで私は此處では、社會進化の形式とは上に述べしが如き概括的或は要約的或は公式的表現にして、特に圖式化し得られるもの(1)を意味すると解し、圖式化可能性を夫れの一特質と見做して置きたいと思ふ。但し私は決して、社會學に於ては形式の概念は、何處にありても常に此の如き意味に解されねばならないと云ふのでないことを注意して置く。尙ほ社會進化の形式の概念の詳しき規定に就ては、私は次節に於てソロキンの社會的文化的過程の詳しき規定を、批判的に考察する場合に、更に改めて論述したいと思ふから、此處では只其の一般的規定を述べるだけに止める。

却説私は簡單ながら以上述べし如くに、ウォームの社會進化の形式の概念を批判的に考察して、其の誤謬を指摘し、そうして社會進化の形式の概念を、正當に規定したいと思ふのであるが、是より更に其の規定の正當なることを、ウォームの社會進化論其物に就て指示したいと思ふ。

今ウォームは、先づ社會進化の原動力は慾望であると認めて、之を研究し、次に夫れよりして、社會進化の過程とは、つまり人間の欲望の實現の過程に外ならないと見て、之を研究し、終りに社會進化の過程は何物を齎らすかを、社會進化の結果の問題として研究して居るのであるが、先づ彼が社會進化の過程に就て論究して居ることを考察すると、人間の欲望の充足は無數の困難に打突かるが、其等の困難の或ものは物に關して起り、他のものは人に關して起る。是れ一人の欲望は他人の欲望と衝突するからである。夫れよりして鬭争が起る。鬭争の現

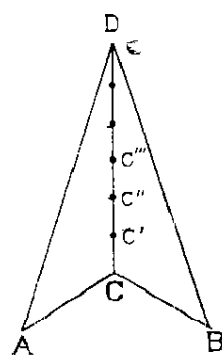
1) (或はタトヒ精確には圖式化し得られないとしても、少なくとも大體上圖式化して表象し得られるもの)だけ

象は人類にて普遍的である。何れの社會進化も、只鬭爭の代價を拂ひ、鬭爭の手段によりてのみ、成就される様に思はれる。夫れよりして、彼は社會的鬭爭の種類を、人種的或は民族的鬭爭、經濟的鬭爭、家族的生活内の鬭爭(男女兩性間の鬭爭、もろくの年齢部類間の鬭爭等々)、知性的鬭爭(諸言語の鬭爭、諸宗教の鬭爭、諸文明の鬭爭、即ち道德的、學問的、藝術的事柄に於ける諸勢力の鬭爭)政治的鬭爭等に分類して研究し、且つ社會的鬭爭一般の社會的役目或は意義を論究して居るが、更に社會進化の過程に於て、鬭爭の原理を補充すると同時に、之を制限する他の一原理として連帶を重要視し、社會生活に於ける連帶の意義或は役目の重大なるを究明したる後、鬭爭と連帶との結合は、「ヘーデルが公式化せるが如き矛盾の同一性」(l'identité des contradictoires)としてゐはなくとも、夫れよりも一層容易に理解し得られるもの、即ち反對の共存及び部分的和合或は調和 (la coexistence et la conciliation partielle des contraires) として「實現されると考へ、そうして夫れは即ち分化 (la différenciation) 或は分業であると認めて、之を論究し、終りに鬭爭或は競争、連帶によりての團結、分化或は分業等の諸方法は、總て同一の目的、即ち人間と環境との益々完全なる調整を齎らすと云ふ目的を有するもの、要するに其等の方法は、總て適應 (l'adaptation) の爲めの方法であるので、實際に於て人間は、自己の欲望を充足するに有用な諸手段を、益々充分に利用すると云ふ利益を收得する爲めに、鬭爭し、團結し、分化するのであると、説いて居るのである。

ウォームが社會進化の過程の眞髓をなすと認めるものは、以上述べしが如きものであるが、夫れの形式、即ち概括的或は要約的表現を先づ命題的に言ひ表せば、或は言葉で公式化すれば下の如くである。即ち社會進化の過程の原理或は方法は、根本的には鬭爭と、連帶と、兩者の和合或は調和としての分化或は分業との三者であつて、そ

うして其等の方法は總て適應の實現を目的とするものである。處で鬭争をA、連帶をB、分化をC、分化の發達の度合をC' C'' C''' ……、適應をDとすれば、右の命題的表現は下の如くに、たやすく圖式化し得られと思ふ。

ウォームが社會進化の過程の眞髓をなすと認めるものの形式は、上に述



べし如くに言葉で公式化し得られるのみならず、更にたやすく圖式化し得られるのであるが、然らば彼が社會進化の結果の眞髓をなすと認めるものに就ては、どうであるかと云ふに、彼は夫れの最とも根本的一般的な方面は、スペンサーの云ふ處の、「混沌たる同質性から、調整されたる異質性へ、進歩的に移行行く」と云ふことであると考へ、そして之れに對立するものの如くに見ゆるタールドの説、即ち社會進化は異質性から同質性へ進歩的に移行行くと云ふ説は、實質的には決して之れと衝突して居るものでないが、併しかゝる誤解を避ける爲めに、スペンサーの公式を下の如くに、少しく修正するのがよいと考へたのである。即ち「社會は同質性に於ける混沌から、異質性に於ける調整へ、移行行くものである」。尚ほウォームは、社會進化の結果の眞髓をなすものの、重要な他の一方面を示すものとして、スペンサーの他の一般的一理論、即ち人間社會の構造に於て、武力型と産業型との二つの型を區別し、そして前者が後者によりて、漸次に取り代はられると云ふ一般的一理論を、承認して居る。そして此の第二の一般的一理論は、第一の一般的一理論の系論或は自然的歸結にして、夫れの發達の最後の項を精密に表はし、特質附けるものであり、且つ兩者相合して社會進化の結果の眞髓をなすものを、最とも一般的な方面に於て、明かに發揮するものであると考へたのである。以上述べし處によりて見れば、ウォームが社會進化の

結果の眞髓をなすと認めるものの形式は、命題的に或は公式的に甚だ簡明に言ひ表はされて居るので、別に之を圖式的に表はす必要もないと思はれる。要するに社會進化の形式の概念は、ウオームの解するが如くに、只社會進化の外形を意味するだけのものと解せず、更に彼が社會進化の眞髓をなすと認めるものの、概括的或は要約的表現をも意味するものと解するに於ては、其等の概括的或は要約的表現は、奇妙にも、彼が社會進化の外形を意味し、そうして當然圖式化し得る可きものと見て考察せる形式よりも、却て容易に、且つより明亮に又精確に、圖式化し得られることが、發見されるのである。

是れより私はさきに第二の問題として掲げしもの、即ち社會進化の形式に關する、從來の主要な諸概念或は諸説として、彼が列舉せるものの何れも、彼の批評する如くに、其の普遍性のさほど大ならぬものであるとするも、夫れが爲めに其等のものの何れよりも、更により大なる普遍性を有する概念或は説を、立てることは不可能であるが如くに臆斷し、かくて從來の其等のものの外に、更に新しき概念或は説を立てようと努力するのは、無益な徒勞であるが如くに論斷するは、學問論上果して正當であるかと云ふ問題を、考究して本節を了りたいと思ふ。

今此の問題を考究するに當つて、先づ注意して置きたいと思ふのは、ウオームの社會學概念に就てである。彼は社會學とはもろくの社會科學の哲學 *la philosophie des sciences sociales* であると見るのであるが、然るに彼の哲學の概念は、大體上通常の佛蘭西實證主義の見解を踏襲して居るものにして、かくて彼は知識目標及び方法に於て、哲學と科學との間に根本的な差異を認めて居ないと思はれる。處で私は知識目標及び方法に於て、哲學と科學との間に、根本的に甚だ重大な差異あることを主張するのである。要するに私は科學とは經驗的事實或は

現實態を経験的方法によりて研究し、相對的及び蓋然的或は確率的な知識を獲得しようとするもの、又かゝる知識を獲得するだけで満足す可きものであるか、之れに反して哲學は科學の與へる相對的及び蓋然的知識に即し、先驗的方法によりて、經驗的事實或は現實態の奥底に於て洞見される絕對的及び必然的な意味を究明しようとするもの、かくて絕對的及び必然的知識を獲得しようとするものであると考へる。（私の哲學概念のやゝ詳しく論述に

就ては、本雜誌昭和十年四月及び五月號の拙稿「第三史觀の可能性」及び同八月號の拙稿「第三世界觀的人格典型」を見られたい。）

そうして私は普通に社會學と總稱されて居るものを、科學としての社會學、即ち嚴密な意味にて單に社會學と稱するものと、哲學としての社會學、即ち社會哲學とに別ち、兩者の差異を大に重要視するのであるが、私の立場からして、科學として社會學と稱するものは、云ふまでもなく一の科學として、經驗的社會現象或は社會的現實態を経験的方法によりて研究し、相對的及び蓋然的或は確率的知識を獲得しようとし、又かゝる知識を獲得するだけで満足す可きものである。然るに相對的及び蓋然的知識と云へば、決して絕對的な或は完全な普遍性を有するものでなくして、比較的な普遍性を有するだけのものである。そうして普遍性の益々より大なる知識を、漸次に或は連續的に獲得して行くことが、即ち科學の任務である。されば私の云ふが如き意味に於ての、科學としての社會學にありては、ウォームの云ふが如くに、社會進化の形式の研究に於て、完全な或は絕對的な普遍性を有する知識が、今日までまだ獲得されて居ないとしても、決して失望してはならない。否な我々は科學としての社會學に於ては、かゝる知識は永久に獲得さる可きものでないことを、始めから覺悟して居る可きである。そうして是れまでに獲得されたる何れの知識よりも、少しでも普遍性のより大なる知識を獲得しようとする努力す可きであ

る。要するに普遍性の益々大なる知識を獲得しようとして、日夜屈せず撓まず努力するのが、即ち科學の使命にして、そうして如何程普遍性の大きな知識に到達するとしても、決して完全な或は絶對的な普遍性を有する知識に到達することの出来ないのが、即ち科學の運命であるのである。

以上述べし處によりて考ふれば、社會進化の形式に關する從來の諸概念或は諸説は、ウオームの指摘する如く、何れも夫れ自身が主張するが如き、絶對的な普遍性を有するものでないとしても、或は夫れ自身が主張するだけ大なる普遍性を有しないものであるとしても、科學としての社會學上から見れば、夫れが爲めに其等の諸概念或は諸説は、決して科學的價値を全然失なふて仕舞ふのではなく、夫れが正當に適用し得られる範圍内に於て、夫れに相當する科學的價値を有するものである。そうして科學としての社會學に於ては、吾々は是れまでに與へられたる其等の諸概念或は諸説中、其の普遍性の比較的に最も大なるものよりも、少しでも更に普遍性のより大なる新しき概念或は説を構成し、或は立てる爲めに絶へず努力す可きである。

要するに吾々はウオームの社會進化形式論を批判的に考察することによりて、ソロキンの社會的文化的過程形式論を批判的に考察するに當つて、根本的問題として特に注目す可きは、左の如き二問題であることを學ぶのである。即ちソロキンは(一)社會的文化的變動の形式の概念を、如何ほど精確に規定して居るかと云ふ問題、(二)社會的文化的變動の形式に關する從來の諸表象或は諸概念或は諸説よりもより勝れたる、如何なる新しきものを構成し、或は立てゝ居るかと云ふ問題。